

<付 編>

## 福岡市内出土の五輪塔と板碑

日本民俗学会員 吉田扶希子

板碑・五輪塔は何のために建立されたのか。墓標か、供養塔か、それ以外か。その建立目的は時代背景と出土状況から検証されなければならない。九州において立石が始まつたのは13C後半であり、14C以降“石塔”が標識として現れる。それは<sup>註1</sup>佐賀県靈仙寺跡で立証されている。そして供養塔から墓標化していくのは鎌倉期から室町期にかけての時代である。福岡市内の場合、北九州地域における<sup>註2</sup>白岩西遺跡や<sup>註3</sup>力丸遺跡のように中世墓地群の一墓から出土したものではない。その上、出土地点に造立されていたとは考えにくいものが多い。

### 1. 五輪塔について

**空輪** 空輪と風輪は一体化して造るのが普通である。時代を追うごとに空輪の頂部は尖り、風輪も鋭角な感じを増す。法量もタイプ別に分かれれる。築港線第1次調査の場合、Tab. 1 No. 1・2は全長（柄の部分は除く）28.5cm、幅（空輪部・風輪部共に）23.5cmを測り、大型である。一方、同一の遺構の出土にもかかわらず、No. 3・4は全長22.0cm、16.0cmと小型になる。形状的にも前者は、風輪基部を垂平に削り取り、シャープ観がある。白岩西遺跡でいうⅡ-1類である。後者は、風輪部にも丸みを残し、くびれ部にもしまりがない。No. 4は、空輪と風輪の段が顯著ではなく、浅い溝も設けているにすぎない。51号土壙を囲む礫中から出土しており、墓であったかもしれない。14C後半～15Cと考えられる。

**火輪** 五輪塔の年代を比定する際、火輪の軒の反り具合をみると最も一般的である。江戸時代に入ると軒の反りは強くなってくる。築港線第2次調査の場合（No. 15）、高さ11.5cm、軒の幅26.4cmを測る。軒は頂部より弯曲を描いて反り上がる。一方、築港線第1次調査（No. 5・6）は直線的に軒が延びる。いずれも軒先で急に反り上がるるものではない。白岩西遺跡のⅣ類である。

**水輪** 火輪と同様に高さ、幅、上下のすばまり方が異なってくる。築港線第1次調査（No. 7～10）は体部は球形を成す。その上下を平坦に削り取った形である。No. 7は高さ42.0cmと大型である。梵字はない。他は高さ29cm前半を測り、いずれも梵字を刻む。No. 8・9は四面にキリーケ、タラーク、アク、ウーンの金剛界四仏を示す。No. 10は四面共、カ（地蔵菩薩）であり、上の石からのつながりであろう。

水輪は鎌倉時代中期から末に、藏骨器として使用されている。福岡市内の出土品にはみられないが、白岩西遺跡では、13C中頃～14C初頭の陶製五輪塔が出土しており、容器として使用した可能性は大いに考えられる。報告者によれば、「火葬場にて焼いた骨を水輪部に納骨して、埋葬地に運び、他の容器に移した後、墓上に建立」とある。

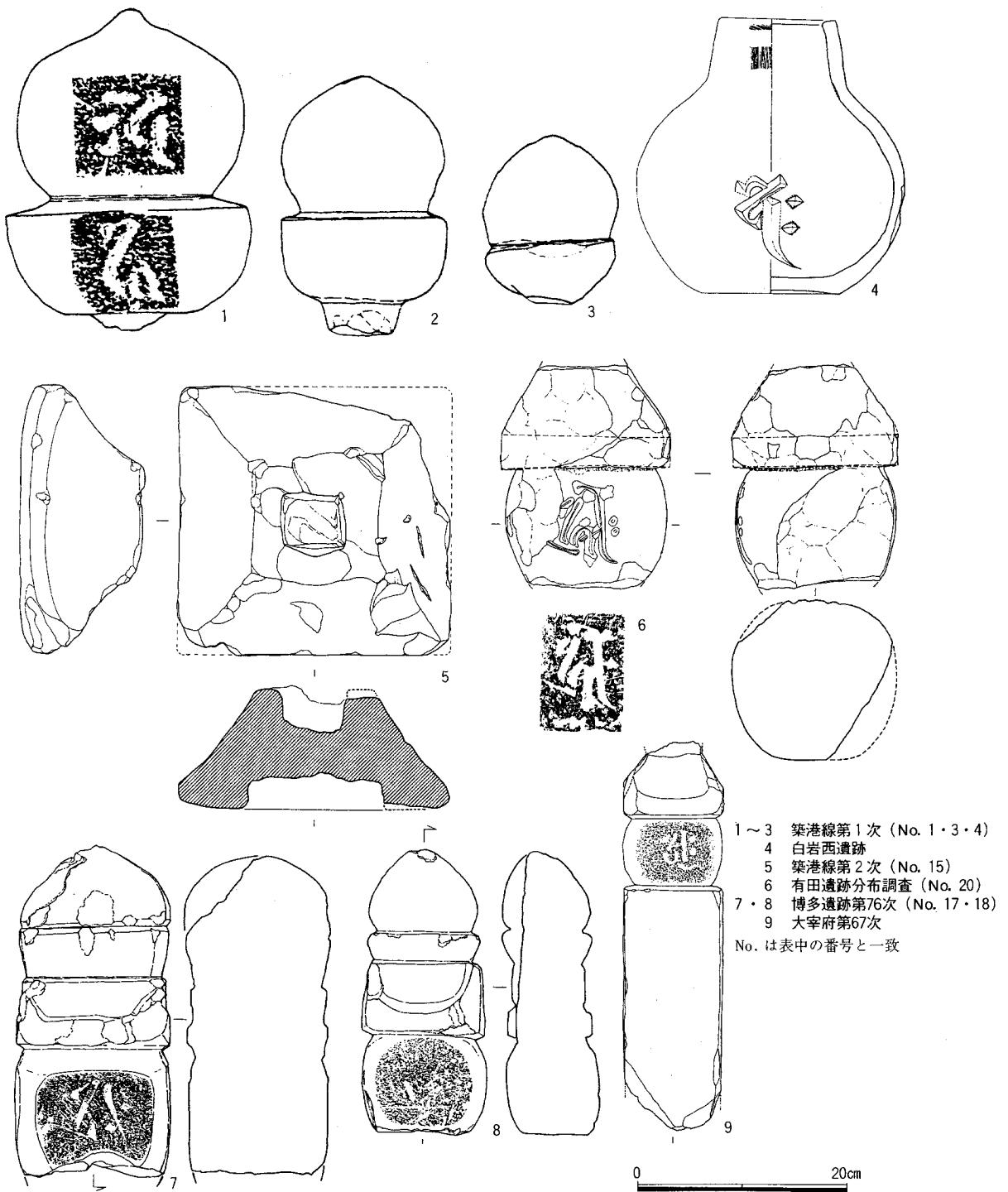


Fig. 83 五輪塔実測図 (縮尺1/6)

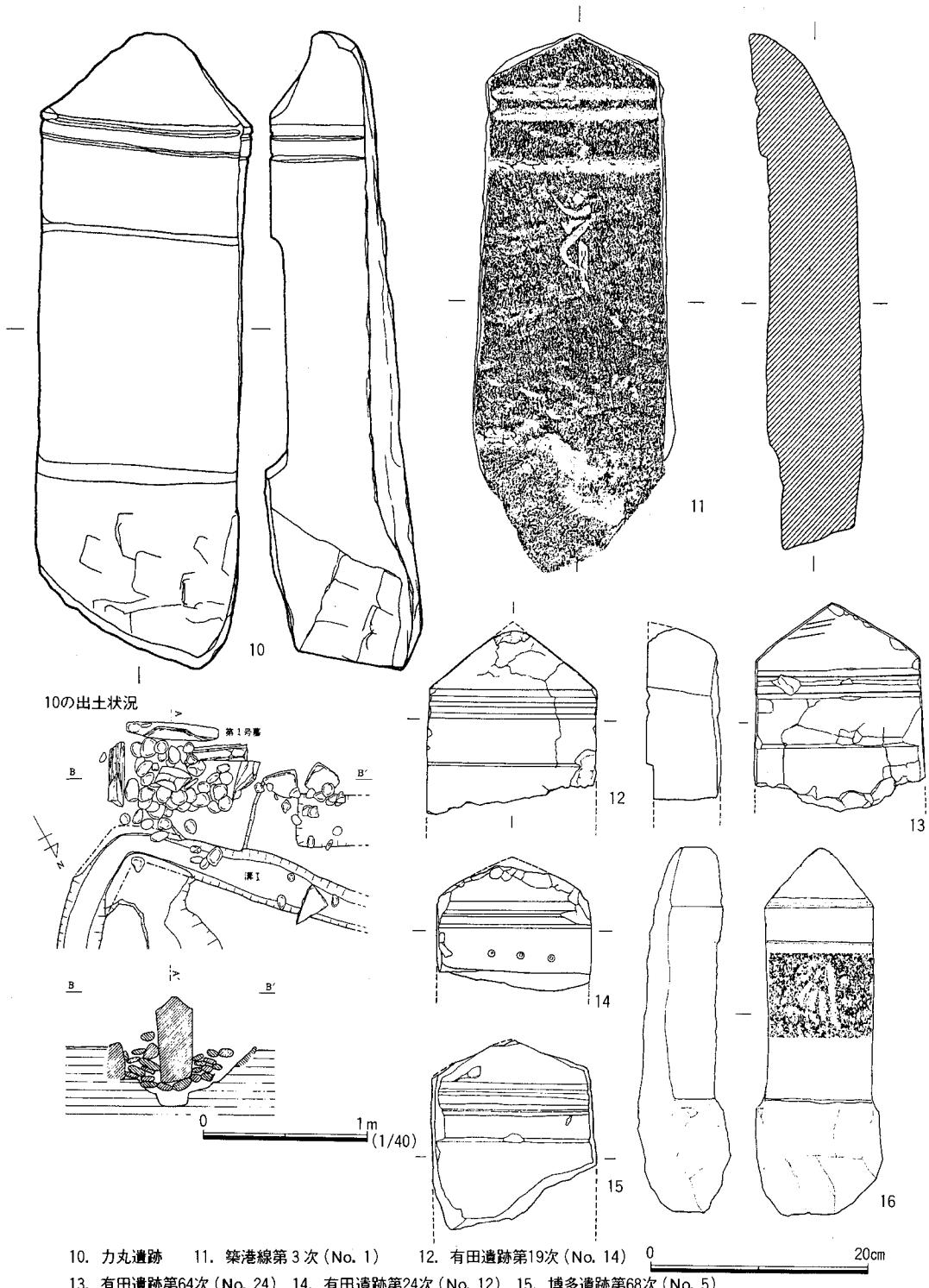


Fig. 84 板碑実測図 (縮尺1/6)

**地輪** 後世、地輪には、正面に法号（戒名）、左右側面に年月日を刻むため、一般的に全長が長くなる。福岡市内の出土は数が少なく、形状も高さ11~17cm、巾26~27.3cmの長方形であり比較はできない。中型に属し、14C後半に属すると思われる。県下では<sup>註4</sup>大宰府第67次調査では地輪が異様に長い一石五輪塔が出土している。

**一石五輪塔** その名のとおり、ホゾ穴によって組み合わせる組合せ式五輪塔ではなく、一つの石で五輪塔を削りだしているものである。五輪塔が全体的に小型化していくうちに生まれたものである。江戸時代にはいるとその数は増大する。福岡市内には鎌倉時代後期の建立と考えられる一石五輪塔が現存する。地蔵松原一石五輪塔で、福岡市東区箱崎町地蔵松原米一丸祀堂にある。梵字も銘もないが、地輪に如来坐像を半肉彫りにしている。博多遺跡群第70次調査（No. 19）は比較的遺存状態が良く、空輪から水輪まで現存する。現存長は30.2cmを測る。空輪部に稜をもち、火輪部の軒はあまり反らない。博多遺跡群第76次調査のNo. 17は同サイズである。しかし、空輪と風輪の境は一条の溝によるのみで、不明瞭である。風輪も直接的で、火輪の軒の造りも小さく、高さも低い。水輪は方形状である。時代的に新しく江戸時代前期のものである。建物の基礎遺構からの検出である。博多遺跡群第60次調査No. 16も同タイプである。No. 18になると一層小型化が進み、現存長27.2cm（空輪から水輪まで）と小さい。空輪と風輪は段をもち明確に分かれる。全体的に厚みがなく、空輪部は縦に長い。火輪部は背が高く、軒は直線的に延びる。徐々に五つの石の境も明確さを失っていく。また墓標化した地輪には前述したように大切な戒名などを刻むため、全体に基礎部分の占める割合が増している。そして最後には五輪塔はその形を失い、板状の墓標にとって変わられるのである。17C後半にはその傾向がみられる。

## 2. 板碑について

板碑の誕生には、<sup>註5</sup>五輪塔の各部を簡略化したという説と、卒塔婆から生まれたという説の二説がある。五來重氏によれば、卒塔婆のあの独特の形は仏教からではなく、民間に根づいていた古来の葬送儀礼により誕生したとされる。いずれにせよ、供養塔として建立され始めた板碑は、15C以降、墓標としての使用が顕著になる。北九州市の力丸遺跡はその典型である。完全な形で出土している。福岡市内ではこのような例はみられない。ただ、配石遺構、土壙からの出土の場合、力丸遺跡のような状況だったのかと想定することができる。福岡市内では、溝の敷石や砥石になったりで、原位置を留めていない。民俗例においても、井戸の積石、地蔵仏に転用と多々みられる。

**板碑** 一石五輪塔同様、時代と共に小型化が進んでいく。築港第3次調査（Tab. 2）のように、幅17.2cmを測る。これは全形を遺存している。頭部山形で、横に薬研彫りを2条施す。額部との境には段を有し、碑身にはパン（金剛界大日如来）を刻む。配石遺構からの出土である。博多遺跡群第68次調査も同様であり、鎌倉時代末から戦国時代の形である。これに対して15C中頃になると、有田遺跡群にみられるように、小型化が進む。有田遺跡群第36次調査出土のNo. 18・19も

同様である。砂岩製がほとんどである。青石塔婆といわれる緑泥片岩製の“典型的板碑”に対して“類型板碑”といわれるものである。武藏国のように緑泥片岩がないため、形状だけ模倣した厚みのある砂岩製の塔婆が広がったのである。この後、供養塔であった板碑は一方で墓標化、もう一方では庚申塔へつながる庚申待板碑へとその姿を変えていく。近世になり、木製塔婆にその主たる地位を奪われ、板碑は本来の姿を変え、やがて消滅していくのである。

### 3. まとめ

中世に盛行した板碑、五輪塔は、当時の日本人の死に対する考え方、信仰に基づいて建立されている。仏教の思想が既に浸透していた日本人は、死者の骨に対して尊厳をもち、特別な靈的存在を抱くようになり、死後の“浄化”を望む。火葬は骨の浄化をより早く進める手段である。“供養”の考えが生まれ、塔を造立することにより、魂の浄化を図るのである。供養というのは死者に対する追善供養であり、逆修であった。逆修とは生きているうちに供養をして、仏の救済を受けようとするもので、この教えは広く浸透していた。<sup>註6</sup>福岡城三の丸出土の板碑には「逆修善根」と刻まれたのも一例である。“本世”に対する考え方の現われである。

13Cに立石が、14Cは石塔類が供養塔として登場する。一部の地域では陶製五輪塔も用いられ、蔵骨器としての役目をする。14Cには五輪塔の形は確立し、宗旨によってその形を変化させていった。14C後半には既に五つの石の境がなくなり始め、小型化が進み一石五輪塔が現われる。以後墓標として全国的に広まるが、17C後半には板碑も供養塔として関東を中心に現われるが、15Cには墓標となり形状を模倣した類型板碑として九州でみられるようになる。

双方の福岡市内の出土状況を考えると、配石遺構と溝が多い。配石遺構はいずれもその場には造立されていないと報告される。しかし、その遺構に付随することは間違いないだろう。溝は敷石状で、その一つに再利用されている。また有田遺跡の場合、16Cの居館の区画溝からの出土が2例みられ、境を意識した塞の神的板碑として考えられる。

以上、福岡市内・県下における発掘調査による出土例を探ってきたが、報告書において記述がないものが多く、報告書の意図と異なる点もあるかもしれない。ご教示をいただきたい。

註1 「靈仙寺跡」 東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村文化財研究会 1980

註2 「白岩西遺跡」 北九州市埋蔵文化財調査報告書第43集 財團法人北九州市埋蔵文化財事業団埋蔵文化財調査室 1985

註3 「力丸遺跡」 北九州市埋蔵文化財調査報告書第26集 北九州市教育委員会 1978

註4 「大宰府史跡」 昭和55年度発掘調査概報 九州歴史資料館 1981

註5 千々和實「板碑源流考」 『日本歴史』284・285号 板碑の源流である二説を論じる。

註6 「福岡市の板碑」 福岡市教育委員会 1992

Tab. 1 福岡市内出土五輪塔一覧表

No.	種類	遺跡名	所在地	出土遺構	長さ	幅	厚	材質	形狀	備考	文献
1	空風輪	築港線第1次	福岡市博多区上呉服町1	4号石組	28.5 28.5 22.0 16.0	23.5 23.5 15.5 13.5				キャ・カ キャ・カ	1
2	空風輪				17 26	29 29					
3	空風輪				42.0 29 21.5 29.0	47 35 29 38.5					
4	空風輪								柄なし		
5	火輪										
6	火輪										
7	水輪										
8	水輪										
9	水輪										
10	水輪										
11	地輪	築港線第2次	福岡市博多区上呉服町1	40号配石	26.9 30.6	27.6 31.8	16.2 23.1	砂岩 砂岩			2
12	地輪										
13	空風輪					26.5		砂岩			
14	地輪			39号配石	27	27.5	17	花崗岩			
15	火輪					26.4	11.5		火輪・水輪	アク16C前半	
16	一石五輪塔	博多遺跡群第60次	福岡市博多区納場町115他	111号溝	(19.5)	(13.2)	14.7		火輪・水輪	アク16C後半	3
17	一石五輪塔	博多遺跡群第76次	福岡市博多区上呉服町569他	SX191	30.2			砂岩	空輪から水輪	アク	4
18	一石五輪塔			SH121	27.2			砂岩		二次の混入品	
19	一石五輪塔	博多遺跡群第70次	福岡市博多区冷泉町338	SX02	30.2			砂岩	空輪から水輪		5
20	一石五輪塔	有田遺跡分布調査	福岡市早良区有田2-22-3	2号土壙表様	21.8			砂岩	火輪・水輪	キリーグ(阿弥陀如来)	6

Tab. 2 福岡市内出土板碑一覧表

No.	種類	遺跡名	所在地	出土遺構	長さ	幅	厚	材質	形狀	備考	文献
1	板碑	築港線第3次	福岡市博多区上呉服町1	59号配石	47.8	17.2	8.5			パン	7
2	板碑	博多遺跡第26次	福岡市博多区上呉服町34		28.4	30.2	9.3		達碑	キリーグ	7
3	板碑	博多遺跡第60次	福岡市博多区納場町115	111号溝 93号石積	20.2 6.9	13.8 7.1	7.1 0.6		破片	溝の石材として利用 16C後半 キリーグ・タラーク 16C後半	3
4	板碑										
5	板碑	博多遺跡第68次	福岡市博多区古門戸町98-1	SE20	(17.8)	15.2	6.5	砂岩			8
6	板碑	博多遺跡第76次	福岡市博多区上呉服町594	SX194	21.2	14.2	6.8			宝町後～江戸	4
7	板碑	諸岡館址	福岡市博多区諸岡1丁目	SK039 SK018-A SK018-B	17.56 29.7 17.5	17.2 15.7 16.2	7.9 8.5 7.1	砂岩 砂岩 砂岩	幅1cmの2条彫り 板碑基部 板碑基部	碑身折面を砥面利用 中央の一部を砥面利用	9
8	板碑										
9	板碑										
10	自然石板碑				西寺専墓地一角	63.2	41.2	8.0		キリーグ・サク・サ(左右逆)	
11	板碑	有田遺跡第24次	福岡市早良区有田2-10-7	濠状遺構内上層	(13.7) (11.8)	16.2 14.2	7.7 6.2	中粒砂岩 中粒砂岩	下部のみ 頭部のみ 径7mmの 円形穴並列	カもししくはカーンか 他に破片3点	10
12	板碑										
13	板碑	有田遺跡第28次	福岡市早良区有田2-22-3	敷石状遺構	17.6	14.6	10.5	中粒砂岩	頭部が長い	梵字字体不明	11
14	板碑	有田遺跡第19次	福岡市早良区有田1-24-4	2号溝(居館又 は屋敷に伴う濠 状遺構)	(15.6) (5.2) (15.3) (12.7)	15.7 (4.7) (14.5) (13.4)	7.6 (3.4) (5.7) (5.5)	砂岩	板碑残片	碑伝か?	12
15	板碑										
16	板碑										
17	板碑										
18	板碑	有田遺跡第36次	福岡市早良区小田部5-143	1号遺館 P31	(15.0) (14.7)	16.5 (10.2)	8.6 6.5	砂岩 砂岩	小型板碑 小型板碑	後世の混入。力丸遺跡と類似 礎石として利用	12
19	板碑										
20	板碑	有田遺跡第42次	福岡市早良区有田2-85	1号溝	14.0	13.8	7.6	中粒砂岩		キリーグ 16C代	
21	板碑	有田遺跡第44次	福岡市早良区有田2-14-9	井戸	14.2	13.6	6.8	砂岩	頭部のみ		13
22	板碑	有田遺跡第86次	福岡市早良区小田部5-143	4号溝(屋敷の 区画溝)	14.8	(8.4)	6.5	砂岩		碑伝か? 16C前～中	6
23	板碑	有田遺跡第83次	福岡市早良区有田1-127-3	1号溝	10.5	14.3	8.6	砂岩	山形 薬研彫り2条	16C後	14
24	板碑	有田遺跡第64次	福岡市早良区小田部5-151	1号溝	(19.2)	15.4	8.4	砂岩	破片		15
25	板碑	有田遺跡第113次	福岡市早良区有田1-28-9	SD02	(10.2)	(5.4)	7.2	花崗岩系		16C後	16
26	板碑	有田遺跡第121次	福岡市早良区小田部5-154-2	SD02	27.8	16.3	11.2	砂岩	碑面のみ 小型板碑	15C	17
27	板碑	有田遺跡下水道	福岡市早良区有田	K10SK04	21.0	14.2	8.0	砂岩		キリーグ	18
28	板碑	有田遺跡第6次	福岡市早良区有田1-20-3	4号土壤 4号土壤	(14.0) (19.8)	15.0 17.7	6.4	砂岩 砂岩			19
29	板碑										

文献 1	「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告（Ⅰ）博多」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第183集	福岡市教育委員会	1988
文献 2	「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告（Ⅱ）博多」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集	福岡市教育委員会	1988
文献 3	「博多30」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集	福岡市教育委員会	1992
文献 4	「博多40」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第332集	福岡市教育委員会	1993
文献 5	「博多41」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第370集	福岡市教育委員会	1994
文献 6	「有田・小田部第6集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集	福岡市教育委員会	1985
文献 7	「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告（Ⅲ）博多」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集	福岡市教育委員会	1989
文献 8	「博多32」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集	福岡市教育委員会	1992
文献 9	「諸岡遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集	福岡市教育委員会	1984
文献 10	「有田・小田部 第1集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 58集	福岡市教育委員会	1980
文献 11	「有田・小田部 第2集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 81集	福岡市教育委員会	1982
文献 12	「有田・小田部 第4集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 96集	福岡市教育委員会	1983
文献 13	「有田・小田部 第5集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集	福岡市教育委員会	1984
文献 14	「有田・小田部 第7集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集	福岡市教育委員会	1986
文献 15	「有田・小田部 第8集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集	福岡市教育委員会	1987
文献 16	「有田・小田部 第11集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集	福岡市教育委員会	1990
文献 17	「有田・小田部 第12集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集	福岡市教育委員会	1991
文献 18	「有田・小田部 第14集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集	福岡市教育委員会	1991
文献 19	「有田・小田部 第19集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集	福岡市教育委員会	1994